

書評

BOOK REVIEW

前田 信彦 著

『キャリア教育と社会正義』

——ライフキャリア教育の探究

河崎 智恵

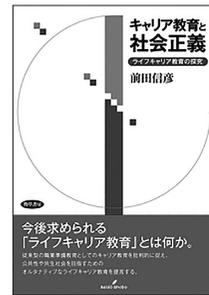
1 本書の特徴

本書は、これまで職業準備教育として位置づけられてきたキャリア教育を反省的に捉え直し、職業能力開発のみを目標とするのではなく、「社会正義への志向」「公共性への配慮」「ケアの倫理」という要素を取り入れた新たなキャリア教育、すなわち「ライフキャリア教育」のあり方を提言した貴重な学術書である。その特徴をまとめると、以下の2点となるであろう。

第一に、本書では、近年欧米を中心にキャリア教育への関心が高まってきた「社会正義」「社会的公正」及び「ケアの倫理」という視点を重視している点があげられる。「人生をどう善く生きるか」という哲学的な問いや、自己の能力を「社会にどう貢献できるか」という視座は、これまでわが国のキャリア教育ではほとんど触れられることのなかったものであり、特筆に値する。

第二の特徴は研究アプローチにあり、大学生を対象とした授業実践に関する計量的・質的データ分析を用いた実証的研究であるという点である。具体的には、著者自身が実施した「PBL（Project Based Learning：問題解決型）キャリア教育」及び「ライフキャリア教育」に関する量的データ分析と、インタビュー内容を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて質的に分析して、ライフキャリア教育の効果や、経験と自己省察過程を明らかにしている。

このように、社会正義やケアの倫理という視点よ



●まえだ・のぶひこ
社会学部教授。
立命館大学産業

●勁草書房

2022年1月刊

A5判・248頁

定価4180円（本体3800円）

り、実証的にキャリア教育のあり方を模索した研究は他に類を見ない。最終的に著者が提示したライフキャリア教育の理念や枠組みは、今後のキャリア教育の方向性に大きな影響を与え得る。

2 本書の構成と概要

本書の構成は、序章、第1章から第6章、及び終章より構成されている。序章から第1章では主に「社会正義」に、第2章から第3章では主に「ケアの倫理」に、第4章から第5章では主に「キャリア決定」に焦点をあてて論じている。第6章では、第5章までの結果をもとに、新たなキャリア教育についての理論的示唆を得て、終章では、新たなキャリア教育、すなわち生き方を探究する「ライフキャリア教育」の方向性を提示している。

次に、各章の概要について紹介していく。まず、序章「本書の目的とその視角」において、研究の目的や視点を明確にした上で、第1章「キャリア教育と社会正義」では、先行研究の検討より、キャリア教育が抱える課題として、以下の3点を示した。第一に、これまでのキャリア教育がとりわけ企業人として働くための汎用的能力の涵養が学習プログラムの中心となってきたこと、第二に仕事そのものが孕む潜在的な危険性、例えば仕事が生活にまで侵食している場合にワークライフバランスを欠いて過労死するまで働くのかといった判断基準について学ぶ機会はほとんどなかった

こと、第三に市民としてどう生きるかというシチズンシップを育む視点が乏しく、企業組織の営利活動と公共的倫理に関する視点がキャリア教育に欠けていたことが指摘された。その上で、グループで実践的に問題解決を行う「PBL キャリア教育」と、PBL キャリア教育をベースに「生き方」について考えるワークショップ等を包含した「ライフキャリア教育」の授業を実施し、一般的な「通常授業」のデータを比較サンプルとして、「社会正義志向」に関する探索的分析、及び事例検討を行った。その結果、「ライフキャリア教育」が社会正義志向の一つである「精神的（スピリチュアルな）成長」にプラスの効果を持ち、学生の自己省察を通じた精神的な成長を介在して、社会正義志向を強める働きをするという結論を得ている。

第2章「キャリア教育とケアの倫理」では、ノディングス（Noddings, N.）や今田高俊らの先行研究より、「ケアの倫理」について検討している。また「社会正義志向」に加えて、「ケアの倫理」と「内省的思考の習慣」に関するデータを用いて、大学生の自己省察の習慣行動やケアの倫理が、社会的公正への行動や社会正義志向に及ぼす影響について分析した。その結果、「ケアの倫理」が高い学生ほど、社会的公正への行動や社会正義志向が強いことが明らかになり、公共性を導くための「生き方教育」としてのキャリア教育の可能性を示した。これらの知見をもとに、第3章「キャリア教育とスピリチュアリティ」では、「社会正義志向」及び「ケアの倫理」に通底する精神性（スピリチュアリティ）の涵養を、キャリア教育の中で展開する可能性について論じている。

第4章「経験知とキャリア選択」では、大学生のキャリア（初職）選択と「経験知」の関係性について、量的データ分析により明らかにした。入学から卒業までの大学生のデータより、学術知（GPA）と経験知（EPA）の初職選択への効果について分析したところ、学術知（GPA）と経験知（EPA）という二つの能力指標は、いずれも初職選択に関して有効な効果を示していた。また、経験知のうち、課外活動を通して獲得された「組織的行動力」、とりわけ「他者と協力する能力」あるいは「グループを統率する能力」といった実践的能力について、初職選択への効果が認められた。さらに、課外活動の内容としては、イン

ターンシップや海外留学経験が初職選択に有意な直接効果を、ボランティア活動やクラブ・サークル活動が間接的な効果を持つことが明示された。これらの結果をもとに、大学における職業実践教育の展開の必要性と、学習成果の多元的な評価基準の見直しの重要性を示唆した。さらに、第5章「職業キャリアに及ぼす経験と自己省察の多様性」では、大学生の「経験」から「キャリアの決断」へ至るプロセスを明らかにした。半構造化面接のデータを用いた質的分析の結果、学生は、与えられた環境から経験を選び取る際に、「自己省察」による内省的な知の獲得をしており、「自己省察」の方法には学生固有の多様性が認められることが示された。

これらの結果を踏まえて、第6章「キャリア教育の思想的基盤と潮流」では、新・旧教育基本法の第一条に掲げられた「教育の目的」における「人格の完成」に着目し、当時の教育刷新委員会の議事録等の分析より、キャリア教育の思想について考察している。そして、旧教育基本法における「人格の完成」は、「能力の伸長」を直接的に意味するものではなく、労働市場での経済行為を目的とした職業能力という狭義の能力ではないことを明示した。また、教育基本法策定に関わった田中耕太郎及び彼が依拠したカトリシズム（トマス・アクィナスの自然法）思想を、現代キャリア教育の思想的基盤の一つと捉え直し、人格教育としてのキャリア教育の意義について論じた。その上で、教育基本法第一条に示された「人格の完成をめざす」とは、「不完全な自己」であることを踏まえた自己認識を育み、社会で生きていく上では他者を必要とし、それ故に他者をも愛するというを学ぶことに他ならないと述べている。すなわち、キャリア教育は「如何に良い仕事に就くか」という市場での経済的欲求のみを省察対象とするのではなく、主体としての自分の「あり方」＝「生き方」を自己省察するものであると考察した。

終章「ライフキャリア教育の探究」では、第6章までの研究結果を踏まえて、これまでの「私智」と「自己責任」を基調としたキャリア教育の理念から、「共生＝公共」に向かう内発的な公共善の涵養を理念としたキャリア教育へと移行していく必要性を示した。最終的には、「ライフキャリア教育」の主たる目的は、

職業を通して共生社会をつくり上げるための「生活原理の基本」を学ぶことであると結論づけ、「就職・職業」「公共性」「ケアの倫理」の3つの要素を含む「ライフキャリア教育」の理念モデルを提示している。

3 本書の意義と展望

以上のように、本書では、「社会正義」や「ケアの倫理」という視座から、教育実践に基づく膨大なデータ分析と文献資料の考察をもとに、「ライフキャリア教育」の枠組みが提案されている。既存のキャリア教育の限界を超えて「キャリア教育はどのようにあるべきなのか」という問いに真摯に向かい、オルタナティブな視点を提起し、新たなキャリア教育を提示した意義は極めて大きい。

また、本書で提示された「ライフキャリア教育」の方向性は、高等教育（大学）のみならず、初等中等教育におけるキャリア教育、進路指導、さらには企業等におけるキャリア・カウンセリングのあり方にも一石を投じるものである。今後、「ライフキャリア教育」の理念が広く理解され、教育実践へとつながるためにも、キャリア教育研究者や実践者、教員、カウンセラーの皆様に、ぜひ本書を読んでいただけるよう推薦したい。

その上で、本書の限界を示すとすれば、著者も指摘しているように、「キャリア教育にとって「ケアの倫理」あるいは「精神性（スピリチュアリティ）」とはいったい何であるのか、教育はどこまでそういった側面に関わるべきなのかについては慎重な議論が必要」（p. 75）であり、カリキュラムにどのように位置づけられるのかといった点については、道徳教育や人権教育等の側面からも慎重な検討が求められよう。また、本研究における一連の研究の実践とデータは特定の大学の学生を対象としたものであるため、今後は、対象を拡大した更なる研究の進展も期待される。

最後に、本書に出会えた一人として、改めて著者である前田信彦氏の一連のご研究に敬意を表し、筆をおかせていただきたい。本書の魅力の一つは、理論的な知見にとどまらず、ライフキャリア教育の実践例が紹介され、その教育効果についても客観的データを基に検証されており、教育実践への具体的な示唆をも与えてくれることである。本書の研究成果に学び、筆者自身も、ライフキャリア教育の視座と理念をもとに、今後の研究や教育実践に取り組んでいきたいと考える。

かわさき・ともえ 奈良教育大学教授。キャリア教育専攻。